

「リプロダクティヴ・ヘルス／ライツ」に関する調査VI

西岡 敦子*

Research into Reproductive Health and Rights (VI)

Atsuko Nishioka*

Abstract

The issue of reproductive health and rights is one of the major issues facing women throughout their lifetimes. In five previous reports, I have looked into ¹⁾ the types of knowledge women have about sexual matters and how they acquire that knowledge throughout their lifecycle, ²⁾ how women feel about sexual behavior, sexual consciousness, level of self-respect, assertiveness, and the nature of sexual roles, ³⁾ the issue of sexuality among the elderly, ⁴⁾ self-perception, eating disorders and cosmetic surgery, and ⁵⁾ friction and assertiveness between the sexes.

In this report I focus on wider issues of violence and sexuality. Results indicate that women who are victims of their partner's violent behavior have lower self-esteem and are more dependent on their partners than women who have higher self-esteem. Moreover, it was found that men and women access different sources for gaining information about sexual issues, with women relying on articles in popular magazine and men relying on adult videos.

キーワード

リプロダクティヴ・ヘルス／ライツ、暴力、自尊感情、依存心、性情報

1. はじめに

近年、若者のコミュニケーション能力の低下が指摘されている。しかし、これは若者の一般的なコミュニケーションに限ったことではなく、男女間、夫婦間においてもコミュニケーションを上手にとることが難しくなってきたようである。男女の別れ話でも、相手の自尊心を傷つけずに上手に別れ話を切り出し、上手く断らなくてはストーカー事件へと発展する危険性があること⁶⁾や、夫婦喧嘩ではきっかけは些細なことであっても、相手の発した言葉にさらに激高するなど、D.V. (ドメスティック・バイオレンス) へ発展していく可能性のあること⁷⁾、子供に対する虐待、特に性的虐待においてNOと言える教育の普及⁸⁾など、前報で述べたとおりである。

*にしおか あつこ：大阪国際大学人間科学部助教授〈2005.9.29受理〉

このような状況を受けて、前報では、女性の一生涯の健康／権利にはパートナーとの関係性が大きく関与しているという点から、若者のコミュニケーション能力、特に、アサーション（積極的自己主張）度を調べ、親密な関係にある男女の関係性とそこにおける男女間のアサーションに関して考察し、一定限の結果を得た。

そこで、本報では、近年のストーカー規制法の成立（「ストーカー行為等の規制等に関する法律」（2000年））やD.V.防止法の成立、改正（「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律」（2001年、2004年））などの状況を受け、暴力自体を捉え、恋人との関係性、暴力の状況、自尊感情や依存心との関係性を考察し、また、暴力を生み出す土壌ともなりうる性情報の氾濫に対する学生の動向やジェンダー意識についても明らかにする。

2. 方法

2-1. 被調査者

被調査者は、本大学に在籍する学生であり、有効回答件数は192件であった。その内訳は、表1のとおりである。

表1 被調査者

	女性	男性	計
18 歳	21	16	37
19 歳	51	37	88
20 歳	18	28	46
21 歳	6	9	15
22 歳	2	1	3
23 歳	0	2	2
無回答	1	0	1
計	99	93	192

2-2. 調査方法

調査方法は質問紙による無記名回答方式で集団調査法を用いた。なお、質問紙への回答の可否は被調査者自身で選択可能であり、質問紙冒頭にその選択欄を設けた。

実施時期は2004年12月～2005年1月である。

2-3. 調査項目

調査項目は、平成13年度文部科学省委託業務である女性のエンパワーメントのための男女共同参画学習促進事業が調査主体となった「リプロレポート2001」⁹⁾の質問紙を参考にした。ただし、この質問紙は女性のみを対象にしたものであったため、男女両性に対応するように、選択肢も含め、加筆、修正を加え作り替えた。（先のリプロレポートは、男性対象には一部聞き取り調査が行われている。）

設問の内容は、フェイス項目（2問）、友人や異性との関係性を問うもの（31問）、自尊感情・依存心を問うもの（15問）、性行動を問うもの（8問）、性情報を問うもの（7問）、暴力の経験を問うもの（6問）、男女平等意識を問うもの（18問）、性教育（セクシュアリ

ティ教育)について問うもの(30問)の、計117問である。選択項目も含まれるので、一被調査者あたりの回答数は100問程度である。

なお、最後の性教育(セクシュアリティ教育)に当たる部分は別稿に譲る。

3. 結果および考察

各項目別に結果を報告する。

3-1. 友人・異性との関係性について

今回の被調査者の友人や異性との関係性は表2のとおりである。

表2 友人・異性との関係性 回答数/N (%)

		女性	男性	計
友人関係	学校でよく話をする	98/99 (99.0)	90/93 (96.8)	188/192 (97.9)
	一緒に遊びに行く	94/99 (94.9)	85/93 (91.4)	179/192 (93.2)
	何でも打ち明けて話せる	98/99 (99.0)	75/93 (80.6)	173/192 (90.1)
異性関係	グループで付き合う	60/97 (61.9)	69/93 (74.2)	129/190 (67.9)
	親友と呼べる	43/98 (43.9)	48/93 (51.6)	91/191 (47.6)
	恋人と呼べる	43/99 (43.4)	24/93 (25.8)	67/192 (34.9)

友人関係では、よく話をし、一緒に遊びに行き、打ち明けて話せる人が、男女平均して90%以上いる状況である

異性関係では、グループで付き合う、親友と呼べる、恋人と呼べるで、徐々に割合は減るものの、恋人と呼べる人がいる女性は43人(43.4%)、男性は24人(25.8%)であった。その内、恋人が社会人であると答えたのは、女性11人(25.6%)、男性3人(12.5%)である。また、恋人との関係を満足と答えたのは(5件法で「とても満足」と「満足」の合計)、女性31人(72.1%)、男性18人(12.5%)であった。一方、恋人と呼べる人がいないので欲しいと答えた女性は43人(43.4%)、男性は47人(50.5%)であった。恋人と呼べる人がいないが特に欲しいとは思わないと回答した人(女性13人(13.1%)、男性22人(23.7%))の理由(自由記述)は、「自分のことで精一杯」、「今はしたいことがあるから」や「時間や行動が制限されるのがいや」、「いたら面倒くさい」など、お互いが自立した関係性を持つようとする姿勢がないような内容が多く見られた。

今回の被調査者は友人や異性に関して以上のような性質をもっている。

3-2. 恋人との関係性について

恋人との関係性を見るために、提示した11項目の行動が二人の間にあるのかないのかと、その行動は主に誰がするのかを「主に自分」から「主に恋人」までの5件法で、恋人と呼べる人がいる人(現実)と、いないので欲しい人(想定)のそれぞれに聞いた。「どちらとも言えない」場合が「3」となる。しかし、男女被調査者間で主に行動する人を一致させるために女性の回答を反転させて、主に行動する人は男性とした。すなわち点数が3未満の場合はその行動を男性がし、3より大きい場合は女性が行うこととした。その結果は表3、表4のとおりである

11項目のうち「①デートの行き先を決める」から「⑧相手を家に送る」の8項目をまず

表3 恋人との行動（恋人あり）

回答数 (%) 上段：女性
下段：男性

設問項目	N	行動あり		平均	有意差
①デートの行き先を決める	41	41 (100.0)	64 (100.0)	2.90	*
	23	23 (100.0)		2.39	
②食事やお茶のお金を払う	41	41 (100.0)	63 (98.4)	2.43	
	23	22 (95.7)		2.45	
③自分の意見を言う	40	39 (97.5)	62 (98.4)	3.21	***
	23	23 (100.0)		2.48	
④細やかな身の回りの世話をする	41	28 (68.3)	48 (75.0)	3.25	
	23	20 (87.0)		3.20	
⑤プレゼントをする	41	35 (85.4)	57 (89.1)	2.91	
	23	22 (95.7)		2.64	
⑥荷物を持つ	41	31 (75.6)	50 (78.1)	1.97	
	23	19 (82.6)		1.79	
⑦相手を励ます	41	37 (90.2)	60 (93.8)	3.11	***
	23	23 (100.0)		2.22	
⑧相手を家に送る	41	29 (70.7)	47 (75.0)	1.28	**
	23	18 (78.3)		1.89	
⑨身体的暴力を振るう	41	2 (4.9)	9 (14.1)	3.00	
	23	7 (30.4)		3.29	
⑩言葉による精神的暴力を振るう	41	5 (12.2)	13 (20.3)	2.20	
	23	8 (34.8)		2.75	
⑪性的な暴力を振るう	41	0 (0)	5 (7.8)	0	
	23	5 (21.7)		3.20	

***:P<.001 **:P<.01 *:P<.05

見てみる。恋人と呼べる人がいる場合では男女平均値でその行動が75%以上あると答えている。また、その行動を男女のどちらがするとも言えない「3」を境界で見ると、男性はデートの行き先を決め、お金を払い、自分の意見を言い、プレゼントをし、荷物を持ち、相手を励まし、家に送るのは自分、すなわち男性の方がしていると答えている。一方、女性は自分の意見を言い、細やかな身の回りの世話をし、相手を励ますのは自分、すなわち女性の方がしていると答えている。男女の差を見ると、デートの行き先の決定は男性の方が、女性が認識しているよりも自分でしていると思っており、家へ送るのは男性より、女性の方が送ってもらっていると認識しているようである。しかし、自分の意見を言ったり、相手を励ますことに関しては、男女共に自分の方がしているという意見の相違が見られた。恋人と呼べる人がいないので欲しいと言う人もおおそ同様の傾向がみられた。

ここに挙げた行動については、恋人関係になったからといってその行動に想定外の極端な変化が現れるわけではなく、想定範囲内のものであることがわかった。ただ、想定自体が主として男性がすることになっているのが現状のようである。

「リプロダクティブ・ヘルス/ライツ」に関する調査VI

表4 恋人との行動（恋人欲しい）

回答数 (%) 上段：女性
下段：男性

設問項目	N	行動あり		平均	有意差
①デートの行き先を決める	42	41 (97.6)	84 (97.7)	2.78	
	44	43 (97.7)		2.81	
②食事やお茶のお金を払う	42	40 (95.2)	82 (95.3)	2.65	
	44	42 (95.5)		2.48	
③自分の意見を言う	42	39 (92.9)	78 (91.8)	3.15	*
	43	39 (90.7)		2.79	
④細やかな身の回りの世話をする	42	30 (71.4)	56 (65.9)	3.63	
	43	26 (60.5)		3.23	
⑤プレゼントをする	42	36 (85.7)	76 (89.4)	3.03	*
	43	40 (93.0)		2.73	
⑥荷物を持つ	42	21 (50.0)	58 (68.2)	2.62	*
	43	37 (86.0)		2.03	
⑦相手を励ます	42	36 (85.7)	77 (90.6)	3.33	***
	43	41 (95.3)		2.63	
⑧相手を家に送る	42	32 (76.2)	73 (85.9)	1.59	
	43	41 (95.3)		1.71	
⑨身体的暴力を振るう	42	9 (21.4)	15 (17.6)	2.89	
	43	6 (14.0)		3.00	
⑩言葉による精神的暴力を振るう	42	10 (23.8)	17 (20.0)	3.10	
	43	7 (16.3)		3.00	
⑪性的な暴力を振るう	42	10 (23.8)	17 (20.0)	2.60	
	43	7 (16.3)		2.71	

***:P<.001 **:P<.01 *:P<.05

暴力に関する「⑨身体的暴力を振るう」、「⑩言葉による精神的暴力を振るう」、「⑪性的な暴力を振るう」については個別に状況を整理してみる。その結果は表5のとおりである。

現在恋人と呼べる人がいる女性は、身体的暴力2件、言葉による暴力5件の回答であっ

表5 恋人間での暴力の状況

回答数 (%)

恋人あり				恋人欲しい			
N	暴力区分	実数	関係性	N	暴力区分	実数	関係性
女 性 41	身体	5 (12.2)	加害 1	女 性 42	身体	11 (26.2)	加害 2
	言葉		相互 0		言葉		相互 6
	性		被害 4		性		被害 3
男 性 23	身体	8 (34.8)	加害 2	男 性 43	身体	7 (16.3)	加害 1
	言葉		相互 5		言葉		相互 5
	性		被害 1		性		被害 1

た。その実数は5人であり、これらの暴力の関係性は自分が加害者との回答が1人、被害者が4人であった。また、現在恋人と呼べる人がいる男性は、身体的暴力7件、言葉による暴力8件、性的暴力5件の回答があった。その実数は8人であり、これらの暴力の関係性は自分が加害者との回答が2人、相互には5人、被害者が1人であった。暴力関係にある女性が12.2%、男性が34.8%と、決して低い比率ではないし、男性は女性の3倍近くの差がある（有意水準5%）。

一方、恋人と呼べる人がいないので欲しい女性においては、暴力関係になるかもしれないと思う率は26.2%、同じく男性は16.3%であり、暴力関係になるのを想定する率が高いように思われた。また、その暴力の関係性は男女共に相互であると思っているようで、男女の差は見られない。

女性の身体的暴力被害が多く報告される中で、相互の暴力にも目を向ける必要がありそうである。恋人を想定する状況において、被害ではなく、加害を含め相互暴力を多く想定するということは自己をコントロールするトレーニングなどで、今後の暴力関係を避けることが十分可能であるとも言える。一方で、被害者にならない、また自分が被害者であることを自覚できて、そこから抜け出せることが出来る教育の徹底も必要であろう。

3-3. 自尊感情・依存心について

被調査者の自尊感情を見るために7つの設問を設定し5件法で聞いた。設問に肯定的な回答が小値となる。設問①②③は反転項目であり、自尊感情が高い方が高得点となる。その結果は表6のとおりである。

表6 自尊感情

上段：女性
下段：男性

設問項目	N	平均	有意差
①私は自分が好きだ	96	3.16	**
	90	2.63	
②私は生きていて楽しい	96	2.14	
	90	2.02	
③私は好奇心旺盛で、行動的である	96	2.47	
	90	2.43	
④私がいなくても誰も困らないと思う	96	3.22	
	90	3.04	
⑤私は人と付き合うのがおっくうである	95	3.71	**
	90	3.29	
⑥私は何となく自信がない	96	2.34	**
	90	2.84	
⑦私は一人でいると不安になる	96	2.70	
	90	2.94	
総合（①②③反転後）	95	22.18	
	90	23.03	

** : P<.01

「リプロダクティブ・ヘルス/ライツ」に関する調査VI

7つの設問のうち男女差が出たものは3つであり、自分が好きであるのは男性、人と付き合うのがおっくうなのは男性、何となく自信がないのが女性であった。また、「どちらとも言えない」「3」から自尊感情が低い方に隔たりが大きいのは、女性の「⑥私は何となく自信がない」(-0.66)であった。反転処理後、総合点での比較では、自尊感情において男女の差は認められなかった。女性の自尊感情の低さを問題にされることもあるがここでは男女に差は認められない。

被調査者の恋人への依存度を見るために8つの設問を設定し5件法で聞いた。設問に肯定的な回答が小値となる。設問③は反転項目であり、恋人への依存度が高い方が低得点となる。その結果は表7のとおりである。

表7 恋人への依存度

上段：女性
下段：男性

設問項目	N	平均	有意差
①恋人に“俺の女、俺のもの” または“私の男、私のもの”と言われるとうれしい	97	2.68	*
	91	3.11	
②恋人に守られたいと思う	97	1.79	***
	91	3.40	
③恋人を守りたいと思う	97	2.07	**
	90	1.69	
④恋人とふれあっている時は寂しさを忘れられる	97	1.95	
	91	2.05	
⑤恋人を失うことに不安を感じる	97	2.01	*
	91	2.36	
⑥恋人の機嫌が悪いと自分のせいかなと思う	97	2.37	
	91	2.37	
⑦恋人が嫉妬するのは自分を愛してくれているからだと思う	96	2.23	*
	91	2.48	
⑧恋人が暴力を振るうのは自分を愛してくれているからだと思う	96	4.79	***
	91	4.43	
総合 (③反転後)	96	21.71	***
	90	24.40	

***:P<.001 ** :P<.01 * :P<.05

8つの設問のうち男女差が出たものは6つであり、恋人に“俺の女、俺のもの”と言われるとうれしく、恋人に守られたく、恋人を失うことに不安で、恋人が嫉妬するのは愛してくれているからだと思うのは女性であった。一方、恋人を守りたいと思い、恋人が暴力を振るうのは愛してくれているからだと思うのは男性であった。また、「どちらとも言えない」「3」から恋人へ依存的な方に隔たりが大きいのは、女性では「②恋人に守られたいと思う」(-1.21)、「④恋人とふれあっているときは寂しさを忘れられる」(-1.05)、「⑤恋人を失うことに不安を感じる」(-0.10)、「⑦恋人が嫉妬するのは自分を愛してくれているからだ」(-0.77)であり、男性では「④恋人とふれあっているときは寂しさを忘

れられる」(-0.95)であった。男女共に④の設問に対して依存的回答をしていることが気になる。反転処理後の総合点の比較では、女性の方が恋人への依存度が高いことがわかった。

恋人へ依存してしまうと二人の関係において自分が見えなくなり、物事に対する的確な判断が出来なくなるのではないか。依存する女性の問題としてのみ捉えるのではなく、恋人である二人の関係性の問い直しが必要なように思われる。

3-4. 性行動について

性行動の状況を調べた結果は表8のとおりである。

ここ1年間に性行為をする相手がいたものは女性57人(59.4%)、男性42人(46.2%)であった。そのものに性行為成立の条件を聞いたところ、ほぼ半数が「お互いが望んだときのみ」であった。しかし、「自分が望まなくても相手が望めば応じる」が約30%あり、その理由は「応じると喜ぶ」「断ると傷つく」であった。相手を思いやることも大事であるが、自分の意志を尊重することも学ぶことが必要であろう。また、避妊状況では「いつもする」ものは60%台にとどまった。その避妊方法はほぼ「コンドーム」であったが、避妊

表8 性行動

回答数/N (%) 上段：女性
下段：男性

性行為 相手有	性行為成立条件		避妊状況	
	1位	理由(複数回答可)	1位	避妊方法(複数回答可)
57/96 (59.4)	1位 お互いが望んだときのみする 24/56(42.9)	1位 応じると喜ぶから 11/16(68.8)	1位 いつもする 36/57(63.2)	1位 コンドーム 34/36(94.4)
	2位 自分は望まなくても相手が望めば応じる 16/56(28.6)		2位 断ると傷つくから 6/16(37.5)	2位 膈外射精 5/36(13.9)
42/91 (46.2)	2位 断ると傷つくから 13/40(32.5)	2位 断ると傷つくから 7/13(53.8)	2位 断ると傷つくから 13/42(31.0)	2位 膈外射精 4/28(14.3)
	3位 断ると傷つくから 7/13(53.8)	3位 断ると傷つくから 7/13(53.8)	3位 断ると傷つくから 1/42(2.4)	しない理由(複数回答可)
				女性 1位 準備していない 10/21(47.6)
				2位 多分妊娠しない 8/21(38.1)
				3位 めんどくさい 6/21(28.6)
				男性 1位 多分妊娠しない 8/14(57.1)
				2位 準備していない 7/14(50.0)
				3位 めんどくさい 5/14(35.7)

人工妊娠中絶		
女性	1位 望まない妊娠なら人工妊娠中絶をする	32/92(34.8)
	2位 医学的理由以外は、人工妊娠中絶は避ける	21/92(22.8)
	3位 生命尊重の立場から、人工妊娠中絶をしないで産む	20/92(21.7)
男性	1位 望まない妊娠なら人工妊娠中絶をする	26/85(30.6)
	女性の意志・決定権として、人工妊娠中絶をする	26/85(30.6)
	3位 生命尊重の立場から、人工妊娠中絶をしないで産む	15/85(17.6)

方法とは言えない「膣外射精」も14%あった。一方、避妊を「いつもする」以外のものの避妊しない理由の上位は男女とも「準備していない」「多分妊娠しない」「めんどくさい」であり、「避妊を言い出せない」「相手が応じてくれない」は各男女計2人（5.7%）にとどまり、無防備なだけの姿が浮かび上がった。現在、日本において、若い世代における性感染症が増加の一途をたどっている。性感染症を避けるためにもコンドームの使用に対する理解、実践が必要である。

人工妊娠中絶に関しては、肯定派が女性で約35%、男性は約60%であった。また、「女性の意志・決定権として、人工妊娠中絶をする」が男性は女性の倍以上の選択率であり、女性の意志の尊重であればよいが、責任逃れのようにも解釈できる可能性があり検討の余地があるだろう。

3-5. 性情報について

性に関する情報をどこから得たかを16項目の選択肢から複数回答で聞いた。結果は表9のとおりである。

順位	女性 N=93	男性 N=90	有意差
1位	①学校の授業・教科書 副読本・参考書 74(79.6)	⑭友達 65(72.2)	
2位	⑭友達 65(69.9)	①学校の授業・教科書 副読本・参考書 58(64.4)	① *
3位	⑥雑誌 50(53.8)	⑪アダルトビデオ 58(64.4)	⑪ ***
⋮	10位 ⑪アダルトビデオ 10(10.8)	6位 ⑥雑誌 49(54.4)	

***:P<.001 *:P<.05

女性の1位は「学校の授業・教科書・副読本・参考書」で約80%の採択率であった。男性のそれは約64%で採択率に差が認められた。また、女性の2位、男性の1位は「友達」でともにおよそ70%で違いはなかった。一方、男性の同数2位は「アダルトビデオ」で、採択率約64%、女性のそれは10位、約11%で差が認められた。また、女性の3位の「雑誌」は、男性の6位でともに約54%で差がなかった。また、全体の選択個数は、平均で女性4.7個、男性5.6個であり、男性の方が1個近く多く選択し、男性の情報収集の幅の広さを表している。

情報の確からしさから言えば「学校の授業…」の採択率の高い女性の方が正しい知識を持っていそうに思われるが、第1報における女性を対象とした調査報告の結果では心許ない限りであった。

男女ともに約54%の採択率であった「雑誌」の性情報について聞いた。結果は表10のとおりである。

雑誌をよく読むとの回答には男女差はなくおよそ60、70%であった。その回答者に雑誌掲載の性に関する文字情報の正しさを聞いたところ男女の差はなく、「正しい」と答えたものはおよそ1/3であった。しかし、それを参考にして行動するかどうかでは「参考に

表10 雑誌の性情報

回答数 (%) 上段: 女性
下段: 男性

雑誌をよく読む N=93 N=89	雑誌掲載の性に関する文字情報 N=67 N=53				一般雑誌の性的写真の掲載	
	情報の正しさ	有意差	参考にして行動	有意差	N=91 N=83	有意差
68 (73.1)	正しい	22 (32.8)	する	43 (64.2)	賛成	8 (8.8)
		18 (34.0)		20 (37.7)		30 (36.1)
53 (59.6)	どちらとも	40 (59.7)	どちらとも	15 (22.4)	どちらとも	55 (60.4)
	言えない	27 (50.9)	言えない	16 (30.2)	言えない	42 (50.6)
	正しくない	2 (3.0)	しない	6 (9.0)	反対	23 (25.3)
		4 (7.5)		13 (24.5)		9 (10.8)
	掲載なし	3 (4.5)	掲載なし	3 (4.5)	掲載なし	5 (5.5)
		4 (7.5)		4 (7.5)	2 (2.4)	

***:P<.001 ** :P<.01 *P<.05

して行動する」女性が約64%に対し、男性は約38%と差が出た。また、一般雑誌の性的写真の掲載については、男性の「賛成」が女性のそれを4倍以上上回り約36%であった。

アダルトビデオに関する結果は表11のとおりである。

表11 アダルトビデオ

回答数 (%)

AV見た N=90 N=86	順位	女性 N=54 (複数回答可)		男性 N=82 (複数回答可)		有意差
		女性	1位	②男性中心に作られている	22 (40.7)	
54 (60.0)	2位	③気持ち悪い	21 (38.9)	⑦性行為の勉強になった	25 (30.5)	
	男性	3位	⑦性行為の勉強になった	11 (20.4)	⑥いいと思う	23 (28.0)
82 (95.3)	4位	⑤なんとも思わない	9 (16.7)	⑤なんとも思わない	18 (22.0)	
	5位	④男女関係対等でない	6 (11.1)	④男女関係対等でない	14 (17.1)	
有意差 ***	6位	⑥いいと思う	5 (9.3)	⑧同じ事をしてみたい		
	7位	①女性蔑視	4 (7.4)	①女性蔑視	5 (6.1)	
	8位	⑧同じ事をしてみたい	3 (5.6)	③気持ち悪い		

***:P<.001 ** :P<.01 * :P<.05

アダルトビデオを見たことのあるものは男性が95%と、女性の60%より有意に高い。それを見た感想は男女とも半数程度は「男性中心に作られている」と認識しているが、「性行為の勉強になった」と思っているものも20、30%いる。女性は「気持ち悪い」と思うものが約39%、男性は「いいと思う」28%、「同じ事をしてみたい」約17%と男女それぞれに有意な差が出た。

雑誌情報とアダルトビデオの結果から見てみると、女性は雑誌の文字情報の確からしさには多少疑問は持つものの実際にそれを参考に行動し、男性はアダルトビデオを参考にす

る傾向があることがわかった。これらの情報の受け手である人のリテラシーを育てていく必要性を含め、これらの媒体の内容に注意を向けていく必要があるだろう。

3-6. 暴力の経験について

暴力を受けた経験を聞いた結果は表12のとおりである。

表12 暴力を受けた経験 回答数 (%)

暴力経験 N=94 N=82	順位	女性 N=73 (複数回答可)	男性 N=56 (複数回答可)	有意差
女性 73(77.7%)	1位	⑥痴漢 53(72.6)	①身体的暴力 40(71.4)	① *** ⑥ ***
	2位	③言葉による精神的暴力 40(54.8)	③言葉による精神的暴力	
男性 56(68.3%)	3位	①身体的暴力 30(41.1)	④無視 18(32.1)	
	4位	④無視	⑤ストーカー 7(12.5)	
	5位	⑤ストーカー 8(11.0)	②性的暴力 5(8.9)	
	6位	②性的暴力 4(5.5)	⑥痴漢	

***: P<.001

今回提示した6項目の暴力を1つでも受けた事のあるものの率は女性約78%、男性68%で男女の有意な差はなかった。女性の1位は「痴漢」であり約73%のものが経験しているが、男性は最下位で約9%であった。男性の1位は「身体的暴力」と「言葉による精神的暴力」の約71%であり、身体的暴力は女性の約41%との間に有意な差が見られ男性の方が身体的暴力を受けている率が高かった。言葉による精神的暴力は女性では2位で約55%であり男女の差はなかった。また、男女共に「性的暴力」は最下位で差は認められなかった。提示された6項目の暴力のうち、3項目以上を経験しているものは34.9%もあった。

また、誰からその暴力を受けたかを11項目からの複数回答可で聞いた結果は表13のとおりである。

表13 暴力の加害者 (複数回答可) (%)

暴力の種類	性別	実数	回答数	1位	2位	3位
身体的暴力	女性	30	64	母親(60.0)	父親/きょうだい(46.7)	
	男性	40	99	友人(47.5)	父親(42.5)	母親(40.0)
性的暴力	女性	4	4	恋人/友人/教職員/見知らぬ人(25.0)		
	男性	5	6	友人(40.0)	父親/母親/学生児/他(20.0)	
言葉による 精神的暴力	女性	40	88	友人(67.5)	母親/教職員(25.0)	
	男性	40	89	友人(75.0)	学生児/教職員(25.0)	
無視	女性	30	43	友人(66.7)	母親(23.3)	学生児(20.0)
	男性	18	23	友人(44.4)	母親(22.2)	教職員(16.7)
ストーカー	女性	8	10	友人(37.5)	学生児/見知らぬ人(25.0)	
	男性	7	7	友人(42.9)	恋人/学生児/見知らぬ人/他(14.3)	
痴漢	女性	53	53	見知らぬ人(92.5)	他(7.5)	職場の上司(1.9)
	男性	5	5	見知らぬ人(80.0)	他(20.0)	—

注 学生児：学生・生徒・児童のこと

採択率が高かった項目は、男女とも痴漢を「見知らぬ人」から受けたもので女性約93%、男性約80%であり当然の結果である。次に男女共に言葉による精神的暴力を「友人」から受けたものが多く男性75%、女性約68%であった。女性では身体的暴力を「母親」から受けたものが60%あり、男性のそれは40%であり、差のある傾向が認められた（有意水準10%）。また、6項目の暴力で加害者として提示した11項目のうち「父親」の回答数を見ると、女性20に対して男性は26であり、被暴力経験者比で女性は27.4%、男性46.4%となり有意な差が認められた（有意水準5%）。男性の方が父親からの暴力経験が高い分、家庭内における父親の暴力を肯定してしまうのではないかと思われる。それがドメスティック・バイオレンスの加害者を男性としてしまう1つの要因になっている可能性は十分にあるだろう。

受けた暴力に対して抗議できたものの率は、暴力を受けた女性73人中8人で11%、男性は56人中15人で26.8%であり、男性の方が高かった（有意水準5%）。状況を受け止めてしまい抗議できない女性像が窺える。これは前回の調査報告内容であるアサーションとも関係するが、相手との力関係からなかなか抗議出来ない状況があるのかもしれない。また、抗議できない状況の中で暴力が振るわれているとも言える。

3-7. 男女平等意識について

男女平等意識をもっているかどうかをそのまま「1」～「5」の5件法で聞いた。平等意識を持っている方が低得点となる。その結果は表14のとおりである。

	女性	男性	平均/N	有意差
被調査者自身	2.62/93	2.40/89		
恋人	2.75/40	1.96/24		***
母親	2.92/85	2.62/82		*
父親	3.25/85	2.89/79		*

***:P<.001 *:P<.05

男女とも男女平等意識をどちらかと言えば持っていると答えている。恋人の男女平等意識では女性が答える彼についてよりも、男性が答える彼女の方が有意な差で、男女平等意識を持っているとなった。また、両親の意識については男性の方が女性よりも、両親共に男女平等意識を持っていると答えている。ただし、女性と男性が何をもって平等と判断しているのかわからず、この結果からは男性の方がその判断基準が甘いのでは、すなわち、平等意識が低いのではないかととれる。次の結果からもこのことは言えそうである。また、女性から見た父親のみが唯一「どちらでもない」「3」を越えており、女性である娘の目からの父親の平等意識が問われている。

具体的な男女平等意識について、提示した9項目で聞いた結果は表15のとおりである。

採択率が高いものは「②男女の関係は常に対等であるべきだと思う」「⑦国会など国の方針を決める場で女性の数が少なすぎる」であった。また、男女の差が出た意見は3項目であった。女性は「⑥男性がもっと家庭で活躍した方が良い」と思っている率が高く、一方、男性は「④男性がもっと社会で活躍した方が良い」と思っている率が高く、男性の生

「リプロダクティブ・ヘルス/ライツ」に関する調査VI

表15 男女平等意識に関する意見

上段：女性 N=95
(複数回答可) 下段：男性 N=90

	回答数(%)	有意差
①結婚後、夫婦が別々の名字を名乗っても良い	58(61.1)	
	52(57.8)	
②男女の関係は常に対等であるべきだと思う	66(69.5)	
	65(72.2)	
③女性がもっと社会で活躍した方が良い	64(67.4)	
	53(58.9)	
④男性がもっと社会で活躍した方が良い	27(28.4)	*
	38(42.2)	
⑤女性がもっと家庭で活躍した方が良い	21(22.1)	
	26(28.9)	
⑥男性がもっと家庭で活躍した方が良い	66(69.5)	**
	46(51.1)	
⑦国会など国の方針を決める場で女性の数が少なすぎる	68(71.6)	
	56(62.2)	
⑧地域活動の場で男性の参加が少なすぎる	51(53.7)	
	38(42.2)	
⑨男性は男性らしく、女性は女性らしくするのが良い	7(7.4)	**
	20(22.2)	
総合(選択可否の④⑤⑨反転後)	平均 6.35	***
	平均 5.51	

***:P<.001 ** :P<.01 * :P<.05

き方に両性が違う意見を持っていることがわかる。さらに、「⑨男性は男性らしく、女性は女性らしくするのが良い」について、男性は女性よりも肯定する率が有意に高い。また、現代の社会状況から男女平等となるような考えに基づいて判断し、採択したものを加点して総合点を見た(設問④⑤⑨は反転項目)ところ、女性の方が男性よりも採択得点が高く、男女平等意識の高いことがわかった。

家庭と職業の分担意識についての結果は表16のとおりである。

将来およそ90%のものが家庭を持とうと思っている。一方、家庭を持とうと思わない人もおり、その理由は「興味がない」「一人でも生きていける」など、家庭を持つことにこだわらない人も出てきているようである。次に、家庭を持とうと思っているものに家庭と職業の分担意識を聞いた。女性は90%以上のものが、男性が職業を持っていることを望んでいる。一方、男性は70%以上のものが、女性が職業を持っていたりも持っていなくてもどちらでも良いと回答し、職業を持たないことを望むものも約6%いる。男女平等になりつつあると言われているが、家庭と職業の両立を考えたときにはまだまだ考え方の格差は大きいようだ。

表16 家庭と職業の分担意識 回答数 (%) 上段：女性
下段：男性

家庭もつ N=95 N=89	相手が職業をもつこと望む N=89 N=80	有意差
89 (93.7) 80 (89.9)	はい 83 (93.3) 18 (22.5)	***
	どちらでも良い 6 (6.7) 57 (71.3)	***
	いいえ 0 (0) 5 (6.3)	*

***:P<.001 *:P<.05

さらに、相手が職業を持つことを望むものと、どちらでも良いもの（回答数計：女性85、男性72）に聞いたところ、「家事も平等に分担」が男女ともほぼ70%を占めた。相手が働いていないことを望むものと、どちらでも良いもの（回答数計：女性5、男性57）に聞いたところ、男性は「自分は職業を持つが、その仕事を中心として、家事の多くを相手に分担してもらい生活する」が約40.4%、「自分は職業を持ち、職業と家庭を同等に考え、家事を相手と平等に分担しながら生活する」が約33.3%であった。ここに該当する女性は全員職業を持っていると答えているが、男性の10人は職業を持たないと答えている。この10人はどうやって生活をしていくつもりなのか。先の研究⁹⁾では、職業ももたず家事もせずの男性が1%いたと報告しているが、ここでは約7.8%（6人）存在している。

3-8. 恋人からの暴力と自尊感情・依存心について

先の暴力を受けた経験を聞いた結果をさらにみると、恋人から何らかの暴力を受けたものは女性14人、男性7人であった。その内の重複を除いた実数は、女性11人、男性は重複なく7人そのままであった。これら、恋人から何らかの暴力を受けていた被害者とそれ以外のものとで、自尊感情と恋人への依存心の関係をみた結果が表17である。両者とも設問に肯定的な回答が小値となり、総合点においては自尊感情の高い方が高得点、恋人への依存心が高い方が低得点となるのは先と同様である。（全体の自尊感情のみの結果は表6、恋人への依存度のみの結果は表7で既に提示している。）

恋人から何らかの暴力を受けたことのある女性は、そうでない女性より、生きていて楽しくなく、自分がいなくても誰も困らないと思ひ、人と付き合うのがおっくうで、何となく自信がない。総合点にも差が出て、暴力を受けていた女性はそうでない女性より、自尊感情が低いという結果が出た。また、恋人への依存心も、俺のものと言われるとうれしく、（恋人を失うと不安で（有意水準10%）、恋人の機嫌が悪いのは自分のせいで（有意水準10%）、）恋人が暴力を振るうのは自分を愛してくれているからだと思っている。総合点にも差が出て、暴力を受けていた女性はそうでない女性より、恋人への依存心が高いという結果が出た。一方、恋人から何らかの暴力を受けた男性は、そうでない男性より、好奇心旺盛で行動的であり、人と付き合うのがおっくうではない。（総合点においても暴力を受けていた男性はそうでない男性より、自尊感情が高い傾向がある（有意水準10%）という結

表17 暴力被害者と自尊感情・恋人への依存度の関係

平均/N

設問項目	女 性			男 性			
	被害者	それ以外	有意差	被害者	それ以外	有意差	
自尊感情	①私は自分が好きだ	3.55/11	3.11/85		2.29/ 5	2.66/83	
	②私は生きていて楽しい	2.91/11	2.04/85	***	1.57/ 5	2.06/83	
	③私は好奇心旺盛で、行動的である	2.64/11	2.45/85		1.71/ 5	2.49/83	*
	④私がいなくても誰も困らないと思う	2.36/11	3.33/85	**	3.57/ 5	3.00/83	
	⑤私は人と付き合うのがおっくうである	3.09/11	3.79/84	*	4.00/ 5	3.23/83	*
	⑥私は何となく自信がない	1.73/11	2.42/85	*	3.43/ 5	2.80/83	
	⑦私は一人だと不安になる	2.45/11	2.73/85		2.57/ 5	2.98/83	
	総合（①②③反転後）	18.55/11	22.65/84	**	26.00/ 5	22.78/83	
恋人への依存心	①恋人に“俺の女、俺のもの”、“私の男、私のもの”と言われるとうれしい	1.91/11	2.78/86	*	3.29/ 5	3.10/84	
	②恋人に守られたいと思う	1.73/11	1.80/86		3.43/ 5	3.39/84	
	③恋人を守りたいと思う	1.73/11	2.12/86		1.57/ 5	1.70/83	
	④恋人とふれあっている時は寂しさを忘れられる	1.82/11	1.97/86		2.00/ 5	2.06/84	
	⑤恋人を失うことに不安を感じる	1.45/11	2.08/86		3.00/ 5	2.31/84	
	⑥恋人の機嫌が悪いと自分のせいかなと思う	1.82/11	2.44/86			2.35/84	
	⑦恋人が嫉妬するのは自分を愛してくれているからだと思う	2.00/11	2.26/85			2.49/84	
	⑧恋人が暴力を振るうのは自分を愛してくれているからだと思う	4.45/11	4.84/85	*	2.71/ 5	4.50/84	**
総合（③反転後）	19.45/11	22.00/85	*	2.43/ 5	24.36/83		

***:P<.001 ** :P<.01 * :P<.05

果が出た。) また、恋人への依存心については、恋人が暴力を振るうのは自分を愛してくれているからだと思っており、総合点には差がなかった。

以前より、親密な関係における女性の暴力被害と自尊感情は関係があると言われているが、今回、アンケートからもそれが明らかになった。また恋人への依存心についても一定限の結果は示せたように思う。自尊感情において、男性の結果は女性のそれとは反対傾向にあり予想外であった。親密な関係における男性の暴力被害については、能動的性的主体性を傷つける出来事となり、性的行動におけるイニシアティブの取り方に影響を及ぼすようで、自信消失も考えられるという結果も報告されている¹⁰⁾が、今回の結果は逆の傾向であった。ただ、依存心の項目にある暴力は愛だと思っているのは、男女被害者に共通している考えであることは確かとなった。

3-9. 恋人からの暴力と男女平等意識について

先の恋人からの暴力経験のある女性11人、男性7人の男女平等意識の自己申告値を調べた。表14の「被調査者自身」に該当する回答結果からみたが、女性には優位な差が認めら

れず、男性は恋人からの暴力経験のある方（1.86 N=7）がない方（2.45 N=82）よりも男女平等意識が高い傾向にある（有意水準10%）という結果となった。同様に、男女平等意識に関する意見の総合得点とも関係性をみたが、男女共に差は認められなかった。同様に、職業に関するものとの関連をみると、恋人からの暴力経験のある男性7人の内、家庭を持ったときに相手が職業を持っていないことを望むものが2名でその比率は28.6%、それ以外の男性は73人中3人で7.9%であり、差が認められた（有意水準1%）。これは従来からの「男は外、女は内」の典型的パターンのままである。暴力の加害者であれば以前から言われている像にそぐう結果であるが、恋人から暴力を受ける男性も「男は外、女は内」であるとは予想外である。女性においては、お互い職業を持っていても自分が多く家事を受け持つなどの関連性をみたが、有意な差は認められなかった。

加害者側のデータをみたいところではあるが、表5に示した恋人のいる女性の加害者は1名、男性の加害者は2名と少ないことより、加害者との比較は出来なかった。

4. おわりに

今回は、リプロダクティブ・ヘルス／ライツに関連して、暴力自体を捉え、恋人との関係性、暴力の状況、自尊感情や依存心との関係性を考察し、また、暴力を生み出す土壌ともなりうる性情報の氾濫に対する学生の動向やジェンダー意識について調査を行った。その結果より以下のことがわかった。

異性との関係性については、恋人と呼べる人が、女性は43.4%、男性は25.8%いた。

恋人との関係性については、二人の間にある行動はおおむね男性がすることになっていると想定しており、それが、実際、恋人関係になったからといってその行動に極端な変化が現れるわけではないことがわかった。

また、恋人間で暴力関係にある女性が12.2%、男性が34.8%と、決して低い比率ではなく、男性は女性の3倍近くあることがわかった。男女問わず、被害者にならない、また自分が被害者であることを自覚できて、そこから抜け出せることが出来る教育の徹底も必要であることがわかった。

自尊感情については、男女の差は認められなかった。

恋人への依存心については、女性の方が高いことがわかった。依存する女性の問題としてのみ捉えるのではなく、恋人である二人の関係性の問い直しが必要のように思われる。

性行動については、ここ1年間に性行為をする相手がいたものは女性59.4%、男性46.2%であった。それらの性行為成立条件には、自分が望まなくても相手が望めば応じるものも約30%あり、その理由は「応じると喜ぶ」や「断ると傷つく」であった。相手を思いやることも大事であるが、自分の意志を尊重することも学ぶ必要があることがわかった。

また、避妊をいつもしているものは60%台にとどまった。若い世代における性感染症が増加の一途をたどっている。避妊のみならず、性感染症を避けるためにもコンドームの使用に対する理解、実践が必要であるとおもわれる。

人工妊娠中絶に関しては、肯定派が女性よりも男性の方が多かった。また、男性からみた「女性の意志・決定権」を検討していく必要があることがわかった。

性情報の入手先については、学校の授業等や友達からが多いことがわかった。男性に関しては、アダルトビデオからも友達と同じ割合で多いことがわかった。また、雑誌情報とアダルトビデオから見てみると、女性は雑誌の性的文字情報を参考に行動し、男性はアダルトビデオを参考にする傾向があることがわかった。これら参考にされる情報の受け手である人のリテラシーを育てていく必要性を含め、これらの媒体の内容に注意を向けていく必要があることがわかった。

暴力を受けた経験については、その率に男女の差はなかった。

女性の経験した暴力の1位は「痴漢」であったが、男性のそれは最下位であった。男性の1位は「身体的暴力」であり、女性よりもその率が高かった。

男性の方が父親からの暴力経験が高いことがわかった。そのことより家庭内における父親の暴力を肯定してしまい、それがドメスティック・バイオレンスの加害者としてしまう1つの要因としてあるのではないかと思われた。

受けた暴力に対して抗議できたものの率は男性の方が高かった。

男女平等意識については、男女とも男女平等意識をどちらかと言えば持っているが、具体的な設問においては女性の方が男女平等意識の高いことがわかった。

女性は男性が職業を持った上でもっと家庭で活躍した方が良いと思っているが、男性は男性がもっと社会で活躍した方が良いと思いつつも家庭内での分担意識ものぞかせている。男性の生き方に両性のずれがあることがわかった。さらに、男性は、男性は男性らしく女性は女性らしくするのが良いと思っていることがわかった。

恋人からの暴力と自尊感情・依存心については、暴力を受けていた女性はそうでない女性より、自尊感情が低く、恋人への依存心が高いということがわかった。以前より、親密な関係における女性の暴力被害と自尊感情は関係があると言われているが、今回、アンケートからもそれが明らかになった。

男女被害者に共通している考えは、暴力は愛だと思っていることがわかった。

恋人からの暴力と男女平等意識については、恋人からの暴力経験のある男性は、ない男性よりも家庭と職業の分担意識において「男は外、女は内」との考えを持っていることがわかった。

性を総合的に捉え、自分の人生をどう生きるのかをプランニングしていく前提として、それに関連した様々な調査データを蓄積し、女性の生涯の、広い意味での健康を支援できるような教育プログラムが作成できればと考えてきた。今回は男性のジェンダー意識や暴力等の結果も一定限明らかになり、男女相互理解の観点より男性の健康も総合的に考えていく必要性も感じている。たとえば男性の更年期障害の問題も知られるようになりつつある中^{11) 12)}、お互いの理解がしやすくなった側面も出てくるのではないかと思われる。

今後、女性に10年遅れをとっているという男性の生き方をどう変えていくのか。リプロダクティブ・ヘルス/ライツに大きく関わる問題であろう。

謝 辞

本調査の実施に際し、ご協力くださった皆さんに深く感謝する。

本稿は、「大阪国際大学・短期大学部 女性学研究所」平成16年度事業研究の成果をまとめたものである。なお、本女性学研究所は平成16年度末をもって廃止され、その業務の一部は平成17年度より本学の「国際関係研究所」に移管されている。

参考文献

- 1) 大阪国際女子大学・短期大学 女性学研究所 (文責：西岡敦子) 「『リプロダクティブ・ヘルス／ライツ』に関する調査」(『大阪国際女子大学・短期大学 女性学研究所年報』 Vol. 2, pp.10-20,2000.)
- 2) 大阪国際女子大学・短期大学 女性学研究所 (文責：西岡敦子) 「『リプロダクティブ・ヘルス／ライツ』に関する調査Ⅱ」(『大阪国際女子大学・短期大学 女性学研究所年報』 Vol. 3, pp.9-17,2001.)
- 3) 大阪国際女子大学・短期大学 女性学研究所 (文責：西岡敦子) 「『リプロダクティブ・ヘルス／ライツ』に関する調査Ⅲ」(『大阪国際女子大学・短期大学 女性学研究所年報』 Vol. 4, pp.10-16,2002.)
- 4) 大阪国際大学・短期大学部 女性学研究所 (文責：西岡敦子) 「『リプロダクティブ・ヘルス／ライツ』に関する調査Ⅳ」(『大阪国際大学・短期大学部 女性学研究所年報』 Vol. 5, pp.17-31,2003.)
- 5) 大阪国際大学・短期大学部 女性学研究所 西岡敦子 「『リプロダクティブ・ヘルス／ライツ』に関する調査Ⅴ」(『大阪国際大学・短期大学部 女性学研究所年報』 Vol. 6, pp.15-21,2004.)
- 6) 「我が身を守る<中>」2000.5.26., 毎日新聞.
- 7) 吉広紀代子『殴る夫 逃げられない妻』1997.青木書店.
- 8) 「子どもへの暴力防止 CAP創始者が大阪でセミナー」1997.12.20., 産経新聞.
- 9) リプロ推進事業実行委員会『平成13年度文部科学省委託事業 女性のエンパワーメントのための男女共同参画学習促進事業 リプロレポート2001～リプロの視点で自分を大切にするために～』
- 10) (財)日本性教育協会『「若者の性」白書-第5回・青少年の性行動全国調査報告』2001.小学館.
- 11) はらたいら『はらたいらのジタバタ男の更年期』2000.芳賀書店.
- 12) 中村 彰『男性の生き方再考』2005.世界思想社.